

國學院大學學術情報リポジトリ

二十一世紀の教派神道：講演

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001708

【講演】**二十一世紀の教派神道**

井 上 順 孝

はじめに

本日の講演では、教派神道と呼ばれている近代に現れた神道教団について、日本の近代宗教の流れの中でおよそどのように位置づけられるかを整理することを一つのポイントにします。もう一つのポイントは、宗教というものも、当然ながら全体社会の大きな変化、流れの中で展開しますから、近代における社会全体の大きな変化が教派神道の形成からこんにちに至るまでの過程に、どのような影響を与えたのかということです。大きくこの二つの視点から見ていきます。

宗教史の流れという観点からは、教派神道の形成は近代における、いわば神道的な文化伝統の再編成というものの中で生じた出来事と捉えられます。近代日本の宗教史は非常に大きな展開をしています。神道だけでなく、仏教も大

大きく変わりました。また江戸時代には禁教となっていたキリスト教が布教を開始しますから、これも大きな変化です。神道も、それまでの伝統的なあり方が改編され、神道を形成する個々の要素にも組み替えが起こります。教派神道もその過程で形成された新しい形態とみなすことができます。そこで、教派神道の形成は、神社神道、それからこんにちでは神道系新宗教と呼ばれているものとの関係に留意する必要があります。明治政府が神道を優遇する政策をとる、神祇制度を再興させましたので、神社神道は江戸時代におけるような、どちらかといえば仏教に従属するような存在形態から大きく変わりました。また神道系新宗教は十九世紀はじめ頃より興りはじめ、明治にはいつてから教団の数も信者の数も増える一方となります。今回は、神社神道と新宗教については詳しく述べる余裕がありませんが、教派神道の展開ということを考えるときには、これらを念頭に置いておく必要があります。

一 神道教派が形成される宗教史的背景

神道教派が「教」として形成された背景について、まず神道の伝統の流れの再編成という観点から整理しておきます。大きな流れで見ると、「祭」・「教」・「学」への分化のプロセスが生じたと理解できます。「祭」は祭祀、祭りごとであり、基本的には神社神道がそれを担うことになります。「教」は教化でして、これがもともとは教派神道の主たる課題であったと言えます。「学」というのは学問でして、國學院大學の前身である皇典講究所などが、それを担います。一八八二(明治十五)年に教派神道の多くが特立したのと同じ年に、皇典講究所もできています。この二つの出来事は非常に密接に関連しています。神道に関わる事柄が、この三つに分化していくということは、明治宗教史における非常に興味深いプロセスと言えます。それを促進した外的要因があると同時に、そういう道を選ぶ内的な条件が

あつたのだと理解できます。

宗教史の流れから概観するときは、江戸時代から明治にかけての神道的な宗教の流れ、動き、思想的展開が教派神道の形成にはきわめて重要です。江戸後期に国学が広まり、これが神道的なものを日本文化の中心に据えようとする明治以降の動きのそもそもの原動力となります。また富士信仰や御嶽信仰といった山岳信仰の存在も見逃せません。山岳信仰はとりわけ明治以降の神道教団の組織化を考える上で重要な意味を持ちます。山に登るにあたっては、講をつくりそれぞれの地域において、信仰に基づくローカルなつながりが形成されます。さらに、小さな組織とそれを統括する組織という、より広いネットワークが出てくる。これが教団神道が形成される先駆的な形態の意味をもったと考えることができます。

伊勢とか出雲には、御師と呼ばれるような人たちがいました。御師は神社と地域の人たちをつなぐネットワークが形成される上で重要な存在です。江戸時代という自由な行き来が難しいと言われていますが、そうした中で信仰を目的とした人々の動きや集まりの萌芽形態がいくつかありますが、山岳信仰はその一つです。

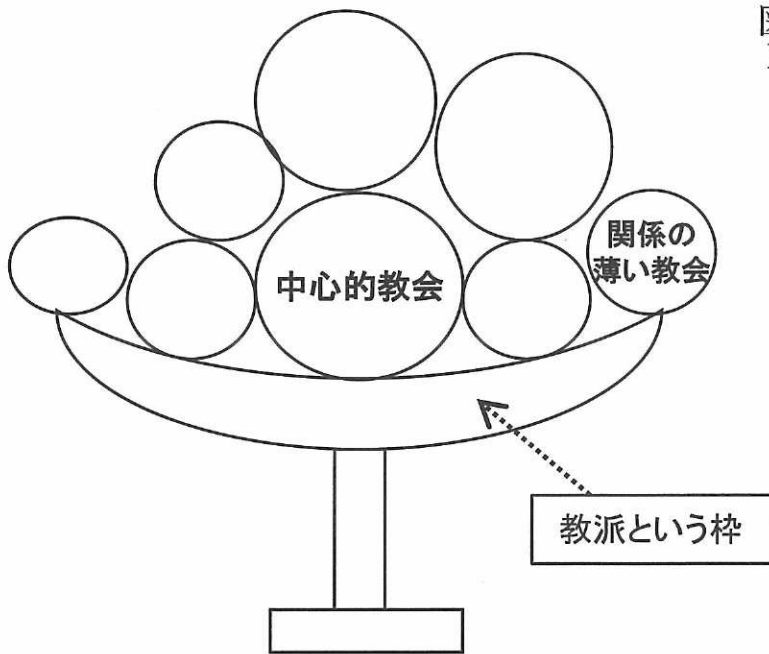
一方、黒住教、天理教、金光教といった、今日では神道系新宗教に含められることの多い教団の存在も重要です。これらが新宗教に含められるのは、一人の教祖が説いた教えが中心となって組織が形成され、弟子たちの活動があつて組織が全国的に広がったものだからです。こうした新宗教という形態も、十九世紀には既にできていて、幕末から明治初期にかけて、しだいに大きな組織となって各地に広まっています。

このように、幕末には神道的な教えをそれなりに体系化していくような教団が出現し始めますし、地域ごとの活動の拠点と、地域を超えた組織のネットワークというものもでき始めていました。それゆえに、こうした神道的な団体が、近代化の流れの中に生じた新しい社会状況のもとにどう展開したかは、近代神道史にとってきわめて関心がもた

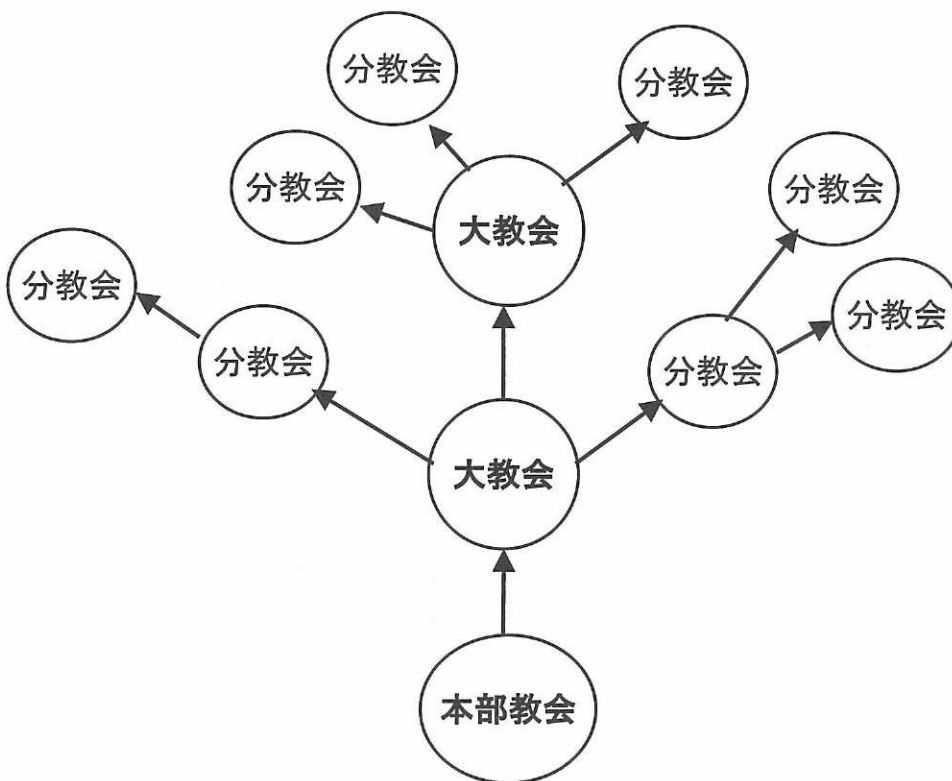
れるテーマです。近世までの神道に関わる組織、信仰内容、実践活動といったものが、近代においてどう展開したのかという関心から、教派神道の動向を見ていくことができます。

神道教団、つまり指導者をいさながら、広い地域に展開していく神道の組織がどのような形態をとるに至ったかについては、二つのパターンを提起しました。この二つを「高坏型」と「樹木型」と命名しました。分かりやすくモデル化したものが図1です。これについては『教派神道の形成』^①という書の中で提起したモデルですが、簡単に説明します。

図1



高坏型



樹木型

樹木型の方が、分かりやすいのですが、神道系新宗教は、このような組織モデルとして理解できます。樹木型は根っこが一つで支部となる組織が枝分かれしていきます。つまり、教祖が説いた教えが各地に広がって、各地の支部教会や分教会と呼ばれる所でも、その教えが共有されています。日本中に、さらには世界中に広がっても、教祖につながるラインが確保されているということです。教義や儀礼、社会的実践の目標を時代に合わせて考えるときにも、常に根っこに帰る、われわれは何のためにこういうものをしているのかを考えるということになります。

これに対して、高坏モデルは一つの大きく、かつ緩やかな枠があって、そこに多少違って、ある程度は共通の要素をもつような小さな組織が一つの連合体のようなものを形成するという構図であります。これは近現代の日本の神道的な思想や運動の形成を考える上で、非常に重要なモデルになるのではと、最近思うようになっております。最初この概念を提起したときは、教派神道のいくぶん寄せ集めの組織と、新宗教的な組織を区別するためにこういうモデルを出したのですが、これはもっと広く適用できるかもしれないと考えようになりました。これについては後で触れます。

組織的にはこうした大きな区分、さらに細かな区分も可能なのですが、ともあれ、それまでのいろいろな運動が開、あるいは教派ができるような条件が明治の前半期にはあったわけです。つまり、それ以前とは断絶された何か新しい形態が突然生じたわけではありません。では、その展開に何が介在したかを整理しておきます。

まず一つは、明治の宗教政策が及ぼした影響です。これが「祭」と「教」の分離に直接的に関わりをもちます。つまり、まづりとと教化を分けるという基本方針が、初期の試行錯誤を経て固まったという点です。宣教使の制度、教導職の制度がうまくいかないということが判明すると、国家が国民教化に直接かわるという方針は転換されます。神官教導職の分離が一八八二年一月に決まります。神社で祭りごとを行う神官は、国民教化に関わる教導職にはなれ

なくあります。これが神社と神道教派との分岐を決定づけます。

ただこれは神道の信仰を展開させていく上で必然性があつたわけではないのです。一般的に言っても、儀礼と教化とが別々の組織においてなされるというのは、無理な話です。どの宗教も儀礼があり、それに伴う教えがあつて、教えがあるから、それに伴う儀礼がある。あるいは儀礼についての教えが説かれる。相補うもの、あるいは相互に密接に関係するものです。

しかし、このように分けられたのは、明治政府が信教の自由を日本は実現しているという建前と、しかし神社を別格にしておきたいという意図が合わさった結果とみなせます。つまり神社は祭祀だから、信教自由というときの宗教のカテゴリーには入らない、特別なもの、国家的なまつりごとだから別のカテゴリーである。それ以外の神道的なものは宗教としてやって宗教神道、教派神道、いろいろな名付け方がありましたけれども、教化活動をやつていい神道ということになりました。一般の宗教史からすれば非常に珍しい区分がなされたと言えるでしょう。

次に起こったことは、「教」と「学」の役割分化です。これは「祭」と「教」との分化ほど明確に起こったわけではありません。一種の役割分担というふうに考えた方が適切かもしれません。「教」と「学」の分離の直接的契機となつたことの一つが祭神論争です。つまり神道で何を中心的な祭神とするかというときに、神道界を二分する大変な大論争が起こってしまったって、収拾がつかなくなりました。この間の事情については、藤井貞文『明治国学発生史の研究』、阪本健一『明治維新と神道』などをはじめ、いくつものすぐれた研究がありますので、参照していただきたいのですが、ここでの議論にとって大事なことは、祭神論争の過程で教法家と皇学派という二つの勢力ができたことです。これが教派神道の形成に深く関わるからです。

教法家に含まれていたのは、出雲大社教の千家尊福、扶桑教の穴野半、實行教の柴田花守、神道大成教の平山省斎、

神習教の芳村正秉という人たちです。これで分かるように、その後それぞれ教派を開いたような人たちが中心でした。神道の教えを人々にどうやって伝えるかということに意を注いでいたと考えられます。

これに対して、神道的な立場からの学的営みということに、重要性を感じた人たちもいました。これが皇学派と呼ばれました。こうした議論が交わされる過程で、神道教派が次々と独立することになります。そして多くの教派が一派特立した一八八二(明治十五年)年には、二つの学問の機関が設立されました。四月三十日には神宮皇學館が設立されました。十一月四日には皇典講究所の開講式が行われました。國學院大學の若木タワ一十八階には有栖川宮記念ホールがありますが、これは皇典講究所の初代総裁である有栖川宮熾仁親王を記念するホールということでした。

こうしたことを考え合わせると、今からちょうど百三十年前となる一八八二年という年は、神道界にとっては非常に重要な出来事が起こった年と言えます。この辺はいろいろ研究がありますが、特に皇典講究所に関しては本機構の校史・学術資産研究センターの齊藤智朗氏が論文を書いておられますので、それを読むと詳しく経緯がわかります。⁽²⁾このとき、神道教派と皇典講究所の両方に非常に影響力があったのが、扶桑教の創始者の穴野半です。教法家として活動するとともに、皇典講究所の設立にもかかわっていました。穴野半は出身が薩摩隈之城で、今は薩摩川内市になっています。

「教」と「学」が役割分化をする上で、象徴的にもまた実質的にも大きな節目というのが一八八二年です。皇典講究所は國學院大學の前身として位置づけられており、校史・学術資産研究センターにおいては、資料集や研究を重ねています。それに対してその後の教派神道の研究の展開に関しては、あまり研究者が多いとは言えません。ここでは一八八二年前後の展開過程について簡単に触れておきます。

一八八二年五月には、一挙に六教派が特立しました。これは一派独立と表現されることもあります。少し遅れて、

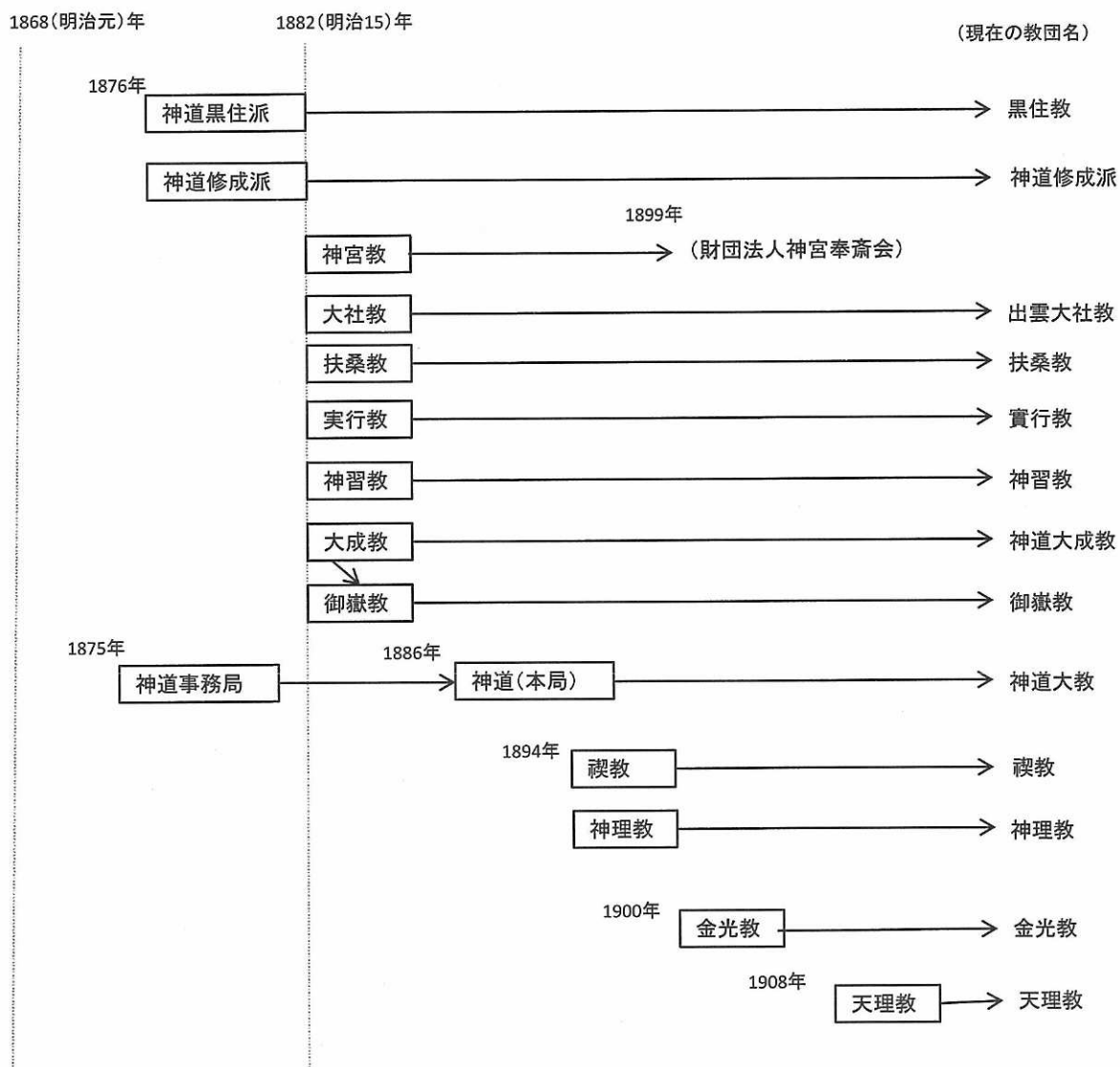
その年のうちに御嶽派が大成教から分かれて、この年に一派を形成した教派は七つとなりました。しかしそのうちの神宮教は一八九九年に財団法人神宮奉斎会となりましたので、のちにできる呼称の「神道十三派」には含まれません。図2に、神道教派の成立の見取り図を書いておきました。より詳細な図は、『教派神道の形成』および『神道事典』⁽³⁾に記載されていますので、そちらを参照してください。この図を見ても、一八八二年が教派にとっていかに画期的な年であったかが一目瞭然です。

しかし、それ以前にも既に一派をなしていたものがあります。それが黒住教と神道修成派です。一八八六年に設置された神道(本局)⁽⁴⁾は、神道事務局の有した機能を継承していますので、これもそれ以前に芽生えていたとみなすことも可能です。これには異論もありますが、ここでは触れません。⁽⁵⁾

その後も教派の独立が続きます。一八九四年に禊教と神理教、一九〇〇年に金光教、一九〇八年に天理教が一派独立し、これで最終的に十三派となりました。神道十三派がここから生じました。ちなみに、仏教も江戸時代初期に黄檗宗ができて十三宗になっていました。戦前は神道が十三教派、仏教が十三宗ということになりましたが、この数は偶然です。

一八八二年にできた派の基本的性格は、先ほど述べた二類型からすると、ほとんどが高坏型になります。つまり、いわば「寄り合い所帯」というに近いものです。同じ教祖の理念を共有して、教えを広げていくのではなく、もとから各地にあった既存の講とか小さな教会といったものが一つの教派に組み込まれていくかたちです。ただ、当初の類型化のときにはあまり重要とは考えていなかったことですが、高坏型が持つもう一つの面にこのごろ注目するようになっていきます。それは神道はこうしたかたちの組織化にあまり抵抗がないということです。抵抗が少ないので、高坏型が可能になったということです。

図
2



これは自分たちが所属している教派なり団体の境界線に、かなりの伸縮性があるということを意味しています。緩やかな境界線で他と接しているということです。比較的簡単に小さな組織が加入したり、また出ていたりする。そうした出入りに関して、「このような人たちを入れることは、教えの一貫性が保てるだろうか」といった議論、あるいは「出ていったのは異端的な主張をした人たちではないか」という議論をしたりしない。ときおり、ある教派から別の教派への転属の例が出ます。また、大成教に属していた蓮門教のように、社会問題化した団体が出ると、除外した例があります。これらは教義的な争いではなく、前者はむしろ経済的問題であることが多く、後者は社会的批判を受けてのことです。こうした点が世界宗教と呼ばれる宗教や新宗教の境界線の作り方と、基本的に性格が違うということが分かります。これは近代における神道的な教団の形成とその組織的特徴を考える上でも、なかなか面白い視点になるのではと思っております。

二 戦後の社会変化の影響

さて、こうした中でできた教派も二十世紀に入り、第二次大戦後にとっても大きな変化を受けることになります。そこで次に戦後に起こった社会変化と教派神道との関係について述べます。実は二十世紀に入ってから日本の宗教史は幕末維新时期とは少し異なる段階を迎えていました。宗教のいわば自由競争が、相当進行していたのです。宗教の自由競争は戦後に起こったことのように思っている人もいるようですが、宗教の変革は法律が一つ変わったからといって急に変わるものではありません。基本的な構造変化は、その前から起こっていたのです。

明治時代の神社神道は国家的に保護を受けましたから、近代神祇制度と呼ばれるものが定着しました。ただし、神

社神道は宗教でないとされていたために、人々に対する布教教化に関しては、逆に手足を縛られていたようなところがあります。教育上も、儀礼面は別として、教えの面ではあまり関わることもできない状況にありました。こうした中に、樹木型の神道教派は組織をどんどん拡大していきます。ところが高坏型のものは二十世紀に入ってから次第に信者数も減るところが増えます。全体として、あまり広まらなくなります。

当時の仏教宗派の状況についても少し触れます。江戸時代に確立された檀家制度は、明治政府の方針で廃止されます。一八七一年に宗門人別帳が廃止されます。これで、ある家に生まれたら、その家の宗旨を継承し、自分の意思では変えることができないというようなことはなくなったわけです。宗旨を変えることも離檀することもできるようになりましたが、これも法律が変わったからといって、すぐに社会全体がそうなるわけではないのです。檀家制度は実質上その後も続いていると言えます。それまでの寺院と檀家との関係は基本的に維持されます。そのことが関係していると考えられますが、新しい社会状況を考慮に入れた布教や教化に力を入れるという姿勢が、仏教宗派にもそれほど強くはみられなかったのです。つまり神社にしても、仏教宗派にしても江戸時代から続いてきた伝統的な宗教の場合、人々に教えを伝えるための工夫をいろいろと考えなくても、一定の数の人が参詣に訪れたり、一定程度の固定的なつながりが維持されていたということになります。

ところが、新しくできた教団やキリスト教は、布教する上では非常に厳しい状況にありましたから、いろいろ工夫をせざるを得なかったのです。キリスト教の場合は教育に非常に力を入れました。こんにち宗教系の学校は小学校から大学まで約九百余あります。そのうち、大体三分の二がキリスト教系です。^①教育という場を通して、いろいろな思想的な影響を与えるという道を選んで、それなりの努力をしてきました。

新宗教についてみると、神道系新宗教、仏教系新宗教と呼ばれる教団が次々と設立されるようになりました。昭和

前期にはそれがかなりの数にのぼります。一九三〇年に会が設立された霊友会などは、すでに戦前においても、けっこう大きな勢力になっていました。創価学会の前身である創価教育学会も同じ一九三〇年に設立され、戦前に数千人の会員をえて、さらに増える勢いを見せていましたが、一九四三年に治安維持法違反・不敬罪により幹部が逮捕され、組織が壊滅状態になりました。神道系では生長の家などが会員を増やしていました。そうした例がいくつもあり、新しい宗教教団が信者を獲得していくということは、都市部を中心に既に戦前に起こっていたわけです。そうした土台の上に戦後の新しい状況が到来したのだということを確認しておきます。

戦後はよく知られているように、政教分離と信教自由が宗教界を包む大原則となります。神社も一九四六年に他の宗教法人と同じような扱いを受けることになりました。さらに宗教法人を新しく設立することが容易となって、多くの新しい宗教法人が設立されました。

このことが、神道教派に大きな影響をもたらします。肝要な点は、神道教派と神社神道との法的な差がなくなったことと、神道教派と新宗教との法的な差もなくなったということです。すべて宗教法人法に基づいて登記が認証され、活動に関する法的条件も同じになったということです。このような法的変化を受けて、戦前は公認された教派の一教会として活動していたような団体が次々と独立した宗教法人となるという現象がみられました。戦前は御嶽教、神道大教といった高坏型の教派に所属していたような比較的小規模の教会でも、一つの独立した宗教法人として活動することが可能になったので、少なからぬ数の教団がその道を選びました。これによって、高坏型の神道教派は傘下の教会数や信者数が減少することになります。(表1参照)

これは、法律が変わったことによってもたらされた変化と言えます。一つの宗教法人として独立する敷居が急になくなったため、高坏型の教派がもっていた弱い境界線は、そこから離脱するのをとどめるほどのしほりをもたなかつ

たということです。あまり高坏の中に収まりなくなかったものは、そこからどんどん出て独立してしまったと理解できます。

表1 戦後、神道教派から独立した教団の主な例

●御嶽教からの独立

御嶽山曾間本教、御嶽教修正派、神宣教、神道国清教、神徳教団、智覚山民主教教団、天常教、天壤教本院、直霊教、日月教、日之教、日之本教、みたま教

●實行教からの独立

神道金刀比羅教、明治教

●神習教からの独立

神之導教、天照教、明正教

●神道大教からの独立

稻荷教、大神教、大三輪教、香取金光教、神ながら教、丸山教、自然社、神道観真教、神道神心教、神道神導教、神道天行居、至誠真柱教、天元教、天善教、瑞穂教、弥山教

●神理教からの独立

洗心教、長生教、鎮宅霊符神教、日の本教

●神道大成教からの独立

修験道教、天地教(兵庫)

●扶桑教からの独立

石鎚教、五十鈴教、大日の本教、大參天教、金毘羅教、神祖教、誠誓教、大道教、天崇教、天地教(京都)、富士教、富士御法、富士本教、真乃道教、弘法宗弘法苑、峯高稻荷大社教、明治教団

宗教の自由競争ということについて言えば、戦後の法制度をはじめとする社会的条件は、それを促進するような内容になったということになります。第二次大戦直前の一九三九年に公布され翌四〇年に施行された宗教団体法は、宗教団体の設立は主務大臣の認可を必要としましたが、敗戦直後の四五年に公布・施行された宗教法人令では、宗教法人の設立は非常に簡便になりました。戦後の法律のもとでは、「宗教法人は自由競争してよろしい」という趣旨になっています。「国がある宗教だけを特別扱いすることはしません」という原則です。⁽⁸⁾ むろん、法を犯せば話は別ですが、れども、「国の掲げる目標に合わないから認めません」ということは言わなくなりました。

政教分離と信教自由のもとでの自由競争は、教派神道にとっては勢力を大きくそがれるという結果をもたらしました。戦前は神道教派ということで、法的にも社会的にも一定の評価がなされたわけですが、そういうくくりが戦後は法的には意味を持たなくなりました。むしろ歴史的な展開を述べる場合には、神道教派あるいは教派神道という概念が有効ですが、実際に宗教活動をしていく上では、かつて神道教派であったかどうかは、ほとんど違いをもたらしません。

そうすると、神道教派(教派神道)はいかなるアイデンティティーをもつべきかが大きな問題となってきました。文化庁宗務課で毎年刊行しています『宗教年鑑』には、神道系の中に教派神道系という小区分がありますが、これはあくまで歴史的な経緯が分かるようにということであって、現在の法的な扱いに実質的に何か区別があるわけではありません。

せん。こうした変化をどのように認識するかは、当事者の方が難しかったのかもしれませんが。制度が変わったことの本質が何であるかを考えるというのは、意外に難しいようです。世代間によっても受け止め方が異なるのかもしれませんが。この辺は私も興味があるのですが、まだ十分は調べていません。

三 二十一世紀の課題

さて、二十一世紀にはいりますと、戦後に急変した教派神道を包む環境は、もはや大前提といったようなものになっています。現代社会、現代の文化状況の課題となっていること、あるいは日本の宗教が抱えている課題といったことに、教派神道がどう向かい合うのか。こういう問いは、きわめて重い響きをもって迫ってきています。これまでの歴史をきちんと踏まえることは非常に重要なことです。教派神道がどのような社会的条件、文化的条件のもとで形成されたかを認識しておくことは、大前提となります。しかし、これまでのやり方の踏襲だけでいいのか、新しいやり方を導入すべきではないか、といった検討がどうしても必要になります。

現代社会はいろいろな問題を抱えております。恐らく教派神道にとってこれらの問題に対して包括的に対処するということは無理だと思います。自分たちが今まで大事にしてきたこと、あるいは自分たちが本来対処してきたことを、現代社会でどのような形で活かせるのかという考え方が、一番自然なのではなからうとかと感じられます。

では具体的にどのような事柄が教派神道の歴史の中で重視されてきたのでしょうか。はつきり指摘できることもいくつかありますが、本日はそのうちの重要と思われる二点について触れたいと思います。一つは、「自然との向かい合いを大事にすること」です。神道にとって、自然というのは古代からずっと大きなテーマです。自然は一方で大き

な恵みを与えてくれますけれども、他方では大いなる脅威をもたらすことがあります。この二つの側面は、今後変わることはありません。それを強く感じながら生きるというのが、神道の一つの特徴であろうと思います。

この点を顧みることは、近代化への反省という視点とも通じます。近代化への反省の一つは、近代文明というもののパワーに目を奪われて、自然が持っていたとてつもない力というものを、軽く見てしまったということです。自然破壊や産業優先一辺倒の近代化路線が、ときに自然からの痛烈なしっぺ返しをくらっているのは、つい最近も目にしたばかりです。東北地方を襲った大津波に言葉を失った人は多いでしょう。天罰発言などは論外ですが、宗教家といえども何をなすべきか、どのような言葉を発すべきか、己の無力さを感じずにはいれなかった人も少なくなかったと思います。

高度成長期以来の社会の急激な変化に目を奪われて、自然の力の底知れなさを失念していたのかもしれませんが。自然の働き、その力に比べての人間の小ささということは、絶えず言われてきているのに、つい軽視するということでしょうか。このような形の反省というのは、神道的な立場に限らず、他の宗教においても、また一般社会においても、かなり広く見受けられるようです。そうしますと、自然との向かい合いを、教派神道なりに考えるというのはひとつのポイントになると考えられます。

この自然への注目、社会全体に広まっているようですが、最近少し特殊な形態が話題を呼んでいます。ただし、宗教関係者にとって諸手を挙げて賛成できるようなことだけではないと言えます。たとえば「山ガールブーム」とか「パワースポットブーム」と呼ばれているような現象です。山や神秘的な場所への関心が高まり、山に登る人、とくに女性が増えているので、山ガールという言葉ができました。またパワースポット巡りをする人も、これまた女性が多いのが分かっています。自然の力へのあこがれとか期待というようなものが、ここに見えてきます。これらに特徴

的なことは、神と人との仲介役を果たすような宗教家や教団があまり必要とされていないということです。個々人が、直接聖地なり山なりに行って、そこで自然やパワーを感じればそれで満足するということのような傾向がみられることです。

それはそれで一つの自然に向かいあう人間の姿勢と言えます。人間の力を大きく超えるような自然に直接一人ひとりが向かい合って、自分なりの何かをつかみたいという気持ちは、宗教の歴史、とくに神道の歴史においてはとても重要な意味をもっていたわけです。書店に行くと、最近は神道や仏教など伝統的な宗教に関する書籍は増えているのが分かります。実際、それらを読んで参考にしながら各地の神社やお寺に行くという人も増えています。ところが、このことは宗教家とか、個々の宗教団体が自分たちの考え方や行動に介在してくることを、むしろ拒否するような面もあることに気付く必要があります。そのことから目を背けると、現代の教団が抱える問題のいくつかを見過ごすことになりかねません。なぜ自然とのかかわりの際に、宗教家や宗教団体が関与してくることを拒否するような人がいるかも考えていいということです。

教派神道においては、自然へのかかわり方の代表的なあり方として山岳信仰というモデルをもっています。ここには、実際に山にのぼることによって、自然の恵みと厳しさを身をもって知るための装置が蓄えられています。山岳信仰を中心としなくても、自然を大切にすることというのを重視しない教派はないと思います。したがって、先ほど述べました自然に向かい合うときの二つの側面、すなわち恵みと脅威ということ、そのことに対して、儀礼や教えの場の人々にどう伝えていったらいいのかをあらためて各派が考えることは重要でしょう。

自然を大事にし、敬いの気持ちをもつというのは古くから日本人の態度の中に見られたわけですが、これは現代において新しい形で広がっていると考えられるわけです。近代化以降の新しい技術革新というのは素晴らしいもので、われわれもその恩恵にあずかっています。これらが自然が突きつける困難の克服に大きな力を発揮してきたことは言

うまでもありません。そのことは否定しようもありません。しかし、自然というのは、そうした人間の誇るべき技術であつという間に吹き飛ばす圧倒的な力をもっています。それを如実に示したのが今回の大震災でしたし、そうしたことはいつでも起こり得ます。脅威という面でいえば、それこそ直径数十キロメートルの隕石が落ちてきたら、世界は破滅的状况を迎えます。そういうような自然のすごさは、むしろしつかり正面からとらえる。技術がここにまで至っているからこそ、これまでとは違った新しい脅威が生じる可能性がありますし、その意味で、現代の問題としてとらえることが求められるのです。こうした問題も視野に収め、自然をただ抽象的な意味で使って、それを敬いなさいとか、大切にしなさいというのでは、宗教家に背を向けがちな人々の心にはなかなか届かないでしょう。

教派神道が関わってきたもう一つの面に触れたいと思います。冠婚葬祭という言葉がありますが、人間が生まれ、育ち、死んでいくという普遍的なプロセスに関わる儀礼の問題です。学術用語としては、通過儀礼とか人生儀礼という言葉がありますけれども、人生の節目のときにおいて、その人間のいのちの流れを再考させ、社会のなかでの自らの立場の変化を自覚させるための儀礼はどの文化にもあります。この面に関して、教派神道はどうかかわってきたのかということです。教派神道は神社神道と違いまして、戦前から神葬祭も執り行うことができました。ということは、神道なりの死の解釈を提示する機会をもっていたということです。葬儀の場面において、人々に死の意味を説き、そこでの神と人との関係や、あるいはこの世とあの世の関係をどう意味づけていくかという役割をになうことができる位置にいたわけです。その意味では、それをもっと前面に出していいのではないかという気もします。

おわりに

私は、現代社会の特徴を示すキーワードとして、「情報化」「グローバル化」という二つの言葉を常々用いています。現代世界には、非常に大きな変化が起こっております。その変化の過程を「国際化」ではなく、「グローバル化」という視点から見ているのはなぜかということを最後に述べたいと思います。

国際的という場合には、国という枠があることが大前提になっています。「日本とそれ以外の国」といったような区分を常に行います。その上で国と国との関係がどうあるべきかという議論になっていきます。ところが、今起こっている宗教の問題は、儀礼やその他の問題も含めて、容易に国境を越えたような地域に波及していきます。しばしば「ボーダーレス」と表現されるのがこのことです。人々が抱えている問題が特定の国や文化圏に限られずグローバルに進行しています。先ほど山ガールやパワースポットの話もいたしましたが、シャーマニズムやアニミズム、マナイズムといったものも多くの国で再評価されています。かつて遅れた信仰のように言われたこうした現象が、ボーダーレスに相互影響し、多くの地域で同時に観察されるようになっていきます。

ヨーロッパの研究者がシャーマンに注目して研究するだけでなく、自分もシャーマンになってしまうとか、そういう例もよくあります。ヨーロッパの人も今までとは違う形で、神道への関心を抱くようになっていきます。異国趣味ではありません。自分の生き方として関心をもつのです。日本の宗教だからというのではなく、たとえば自然を大切にする宗教の一つのあり方として、というような関心です。数年前、アルジャジーラというアラブ系の有名なテレビ局が神道取材し、放映したことがありました。^⑨その制作の手助けをしたのですが、放映後非常に好評であったと担当者

から報告を受けました。これを日本の宗教が再評価されたというような受け止め方をするのは、国際化の発想です。どうもそうではないのではないかと私は感じています。その背景には、文化ごとに人を区分するというよりも、むしろ人間が具体的な文化の中で立ち向かい、解決しようとしてきたこと、それ自体の中に含まれていた普遍性が、グローバルの時代には、文化を超えて自覚されるようになったのだと思います。

そうすると、私はこの宗派とか教派という枠は枠として、もっと広く考えるというスタイルもあってもいいのではないかと考えます。情報化、グローバル化が進んでいる時代であるからこそ、境界線についてはフレキシブルに考えることが迫られているのではないかと。自分たちとこの派は違うということをやあまりにも出していくと、結局自分たちの派だけが救われればいいという独善的な方向に向かう可能性もあります。教派は緩やかです、高坏型です。それは境界線があいまいで、柔軟性に富んでいる。よく言えばそのように解釈できます。私はこの「よく言えば」という側面をもっと積極的に見たほうがいいと思います。そのフレキシビリティは何かというと、異なった文化や民族など、いろいろなところでの問題も常に自分たちの問題として取り込めるし、「何々教を信じていないから、君たちは仲間じゃない」という発想法になりにくいのです。いろいろな文化の人とも手をつなぎやすい構造としてとらえる方向性です。

死や自然の問題は、人間にとって、そして宗教にとっても最も原初的な問題です。それゆえ呪術が非常に活躍する場でもあります。呪術的な思考法や行動というものは、かつては近代が乗り越えたと考えた人もいるんですが、私自身は現状は決してそうではないと捉えています。原初的なものこそ、根源的なパワーがあります。ただし、原初的なものは文化による調停をしばしば拒否しますから、非常に危険な側面も秘めています。

たとえばアメリカの原理主義者の中には、墮胎に強く反対して、「生命が第一に大事である」という「プロライフ」

の主張をする人たちがいます。このプロライフの立場、つまり生命が大事だという人たちが、墮胎をする医師を射殺するという事件がありました。これは非常に分かりやすい例なので挙げました。プロライフというのは、女性の意志を尊重する「プロチョイス」に対抗するもので、宗教的な理念に関係する一つの文化的主張です。生命を大事にするというのは理性的な主張ですが、自分の敵対者と思われる人を殺すという行動は非常に原初的です。自分の敵対者を殺すことで排除するという行動形態は、人類史の原初から備わっていたと考えられます。人間は宗教面で非常に理性的な行動や考え方をすることがあっても、ときに人間の脳の奥深くに潜んでいて、ひょっとしたら百万年ぐらいの歴史を持つような衝動が、それを凌駕するかもしれないという怖さがあるわけです。最近注目を集めている進化心理学などは、そのような見方をします。そうした原初的なものは捨て去れるとか、理性で押さえ込めるものではありません。その力を自覚した上で、いかに適切に現代社会に対応させていくのかを考えるしかありません。

グローバル化が進行する時代だからこそ、人間の原初的な感情の処理は、より大きな問題になっていくと思います。時代の変化を意識しつつも、よりベーシックなことに教派の方には力を入れていただきたい。身の回りの生き方にどうかわれるかということをつねに考えていただくと、二十一世紀の教派神道の課題が見えやすくなるのかなと考えております。

註

(1) 拙著『教派神道の形成』(弘文堂、一九九一年)のとくに第一章を参照。

(2) 齊藤智朗「松野勇雄と皇典講究所・國學院大學」(『大学史資料センター報告 第32集 大学史活動 大学創立者

をめぐって』明治大学史資料センター、二〇一〇年）参照。

(3) 国学院大学日本文化研究所編『神道事典』（弘文堂、一九九四年）の「教派神道」の項目参照。

(4) 正式な教派名は「神道」であるが、一般用語としての神道と紛らわしいので、通常は事務局のあった「神道本局」という呼称が用いられる。

(5) 詳しくは、拙論「神道大教にみられる「神道」の教団化過程」（『神道宗教』一九九・二〇〇、二〇〇五年）を参照。

(6) 蓮門教の事件に関しては、奥武則『蓮門教衰亡記』（現代企画室、一九九六年）、および拙著『新宗教の解読（増補版）』（筑摩書房、一九九六年）を参照。

(7) これについては、国学院大学日本文化研究所編『宗教教育資料集』（すずき出版、一九九三年）を参照。

(8) 一九九五年に初めて宗教法人法が改正されたが、それはオウム真理教による地下鉄サリン事件のあと、宗教法人の所轄庁の監督のあり方が問題になったことが一つの理由である。

(9) 二〇〇六年に放映されたもので十数分の番組である。

付記 本稿は平成二十四年六月五日（火）に國學院大學で開催された「神道六教派特立百三十年記念公開シンポジウム」における基調講演の内容をもとに加筆したものである。